



「気候変動」－その行き着く先は？

新聞で何とも不気味な現象の記事を読んで、そのことが、ずっと頭の片隅に引っかかったような状態が続いている。ご覧になった方もいるだろうが、シベリアの永久凍土地帯で、月面のクレーターのような、謎の『巨大な穴』が発見されたというのだ。(朝日2015年7月20日付)

場所はロシア・西シベリアのヤマル地方の地平線まで広がるツンドラ地帯で、昨年6月、輸送用ヘリの操縦士が初めて見つけたという。穴は直径約37メートル深さ約75メートル。記事が書かれた時点で4個が確認されている。記事によると、近くには天然ガス田もあり、「永久凍土が溶け、メタンガスの圧力が地中で高まって爆発した」との説が有力とのこと。ロシア科学アカデミーの科学者の話では、「このところの異常に高い気温の影響を受けた可能性がある」「将来、地球温暖化が進み、凍土全体から、温室効果の高いメタンの大量放出が始まれば、さらに温暖化を加速させかねない」そうだ。何か確実に進行している。最近の気候は「異常気象」などという言葉で陳腐化させてしまった。「異常」が異常でなくなってきつつある。

今年の夏は連日の猛暑だったが、お盆の頃から一転して一か月くらい気候が後にずれた感じの長雨が続けている。8月の初め日光市の南部の地域が竜巻を含む突風と落雷、短時間の豪雨、それに雹(ひょう)に襲われた。我が家では駐車場の屋根に穴が開き、樹齢40年くらいになるヒノキ2本が根こそぎ倒れた。二股に分かれた、高さ15メートル程のエゴの木の片枝が折れてぶら下がったままだ。しかしこの程度の、以前には日本で見られることのなかった竜巻を含む被害は、今では日本中どの地域でも、それほど珍しくなくなってしまった。

テレビのニュースを見ていたら、8月下旬の台風の被害を受けた鹿児島県の離島の様子が報じられていた。住民の70代の女性は、風で木造平屋の自宅の屋根と家具調度品を殆んど飛ばされてしまい、生まれた時からその家で暮らしてきたが、これほどの風(おそらく60～70メートル)は、初めて

の経験で恐ろしかったと涙声で話していた。また石垣島では今年の台風で風速71メートルを記録したという。

今から30年ほど前に読んだ「自然の終焉」(ビル・マッキベン著 河出書房新社1990年刊)という本に、将来台風は風速60～70メートルになるとあったように記憶していて、いずれは現れるとは思っていたが、ついにその通りになりつつある。

それらの変動が、いわゆる「地球温暖化」の一端なのかどうかは私には分らないが、大きく見れば、こうした気候の変動の原因が、人間の営み、欲望、経済の成長と密接に結びついており、そうしたものの際限なき展開が気候の変動をさらに加速させているという図式に間違いはないようだ。

先日、ちょっとしたご縁で、日光出身でチリに農場を持っていて一時帰国されている方(Oさん)と少しお話しする機会があった。その話してくれた内容が、極めて由々しき地球の現実を照らし出しているように思うので記しておきたい。

Oさんによると、干ばつ状態のチリの南緯42度付近では「金持ち」が土地を購入して、「貧しい人たち」に金を渡してそこに火をつけさせ、広大な森林を燃やしている、と言う。それらの土地の大半では牧畜が営まれるが、牛→豚→羊→山羊と飼育する動物を変えていかざるを得なくなる。最終的に山羊は木や草の根っこまで食べ尽してしまうのでここまでは来ると土地は荒地になり、結局は砂漠化が一層進行し、干ばつもさらに深刻になってゆくことになる。

アマゾン河流域などでも熱帯雨林を切り開き大豆を植え付けたり、牧畜をお

目次:

気候変動 その行き着く先は	1
川むしたんけん 下小倉・行川	2
川むしたんけん 霧降川	3
湧き水と生きる町	4

お知らせ

次回の定例会
2015年9月25日(金)
日光市民活動支援センター
午後1時～2時



こなったりしている。こうして熱帯雨林はなくなりつつある。こうした状況が続けば、いずれイグアスの瀧なども水量を減らして無くなってしまおうのではないか、とのことであった。

しかし、こうした問題は既に1970年代から、ローマ・クラブの「人類の危機」レポート(「成長の限界」ダイヤモンド社1972年刊)や、いわゆる「ガイア仮説」を提起したJEラブリックの「地球生命圏」邦訳工作舎1984年刊)など、識者たちの間では早くから論じられてきたことであった。そうした論議から二酸化炭素削減のための国際会議などへと進んで行ったわけであろう。私自身、80年代の一時期、エコロジ的な活動に関心を抱いていたこともあった。様々な形での緑の党的な組織結成の動きなどもあった。しかし、どういうわけか緑の党的な政治スタイルは、その後日本では根付くことがなかった。自分に引き付けて考えてみると、脱原発や地域における様々な自然保護的な運動、産業廃棄物の問題など、個別的課題へのかかわりで、手一杯、という状態になってしまった。

だが、それから30年後の今日、事態は一層深刻で、根源的なものになりつつあるように思われる。こうしたことを行く手には、どのような事態が我々を待ち構えているのだろうか？

科学的素養を持たない私のような者には手に余るテーマだが、この機会に、その当時科学者たちが予測していたことを、今の時点で改めて読み直してみたらと考えてこの文を書き始めたのだが、もはや紙数も尽きかけている。次号では、1990年代に出版された「ジオ・カタストロフィー」(上下巻坂田俊文監修・NHK出版1992年刊)などを参考に考えてみたい。

同じようなことは誰でも考えるようで、ちょっと蛇足的に付け加えておくと、アメリカでは6年前に放送されたABC放送の「地球2100」と言う二時間番組が、今になって注目を集めているという(東京新聞『太郎の国際通信』15年9月6日付)。ジャーナリストの木村太郎氏によると、この番組は「気候変動による世界の終末が2015年に始まることを見通していた」のだそうである。すなわち、2015年に巨大ハリケーンなどの気候上の大きな問題が表面化する。そうした異常気象に対処すべく、温暖化防止の国際会議が開かれるが、中国、インドが先進国の提案を拒否して決裂してしまい、それ以後、地球環境は悪化の一途をたどっていく。そして21世紀末に向かって人類は自らの手で滅亡の道をたどるとというのが筋書だ。

だが番組は最後の数分間、もう一度、人類に選択の余地を残している。『もしこの運命を変えることができるとしたら、あの時に戻ることです。』番組は再び2015年の会議に戻り、この会議で各国の合意が成立する。化石燃料の使用を減らし、人々は生活スタイルを変えていくと希望を持たせているとのこと。

今年になって、とりわけこの番組が多くの人々の注目を集め出したのは、2015年が人類の滅亡を回避する「最後のチャンス」という設定だからだ。奇しくも本年12月には現実世界でも、パリで国連気候変動枠組条約第21回締約国会議(COP21)が開催されるという。果たしてこの本物の国際会議では、途上国と先進国との合意は成立するのだろうか？ (次号に続く) (森)

川むしたんけん隊



5月30日(土) 行川(上小倉橋近く)

8月22日(土) 霧降川

行川(上小倉橋近く)

NPOなんとなくのにおと共催のたんけん隊は、昨年引き続き行川で実施。昨年は千本木(5月)、明神(10月)でしたが、さらに下流の上小倉橋の少し下流の河原を採取地点としました。採取条件は以下のとおりです。

天気:晴れ(気温 28 °C、水温 24°C)

川幅:約30m、水面幅:約10m

生物を採取したのは右岸

生物採取場所の水深:5~20cm

流速:毎秒 20cm

川底:礫(れき)

水の濁り:なし、におい:なし きれいな水

当日はお天気にも恵まれ、殻を脱ぎ捨ててたつたいま飛び立とうとしているコオニヤンマを数匹発見。子どもも大人もいっしょに川むしを探しました。見つかった指標生物は次のとおりです。とくに多かった生き物は太字で示しました。小倉の行川は「きれいな水」に分類できそうです。

(水質階級 I)

ナミウズムシ、ヒラタカゲロウ類、カワゲラ、ヘビトンボ

(水質階級 I ~ II)

ヒゲナガカワトビケラ類、タニガワカゲロウ類

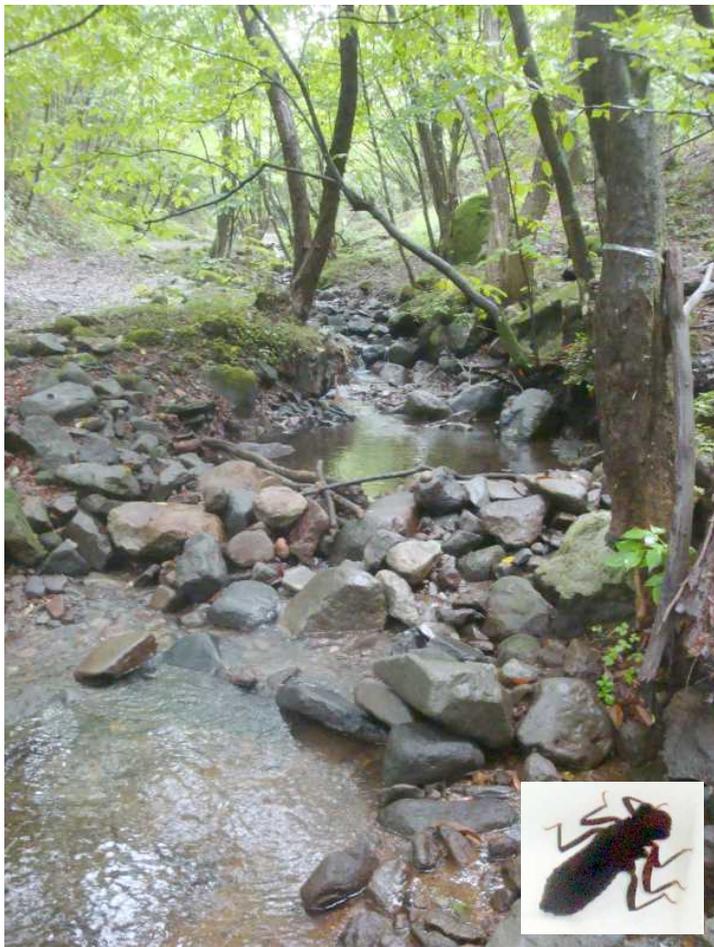
(水質階級 II)

カワニナ類、コオニヤンマ、ヒラタドROMシ類

天候、水量、ロケーションなど満点に近い条件でした。子どもたちの参加が少なかったのは、どうやら地域や学校の行事と重なってしまったためらしく、実施日については、次回の課題となりました。(T)



小倉・行川での川むし採取



活動報告

3月27日(金)	定例会
4月24日(金)	定例会
5月22日(金)	定例会
5月30日(土)	川むしたんけん隊 NPOなんとなくのこわとの共催
6月26日(金)	定例会
8月22日(土)	川むしたんけん隊 NPO和音との共催
8月28日(金)	定例会

霧降川で川虫たんけん

前日の天気を引きずらず、曇りから晴れ間がのぞいた8月22日(土)。いのくら児童クラブの夏休み恒例行事「川虫たんけん」。岩の間を流れる水に入って、児童23名と保護者を交え虫の採集をしました。足首が隠れるほどの丁度良い水量でしたが、22℃の気温が水の中は16℃。水の冷たさを子供達は体感できたようです。

山地溪流は平地の川より低温であり栄養も少ないので、生き物の種類も限られると予想していましたが、思いもよらぬ発見もあり、なかなか面白い探検でした。見つかった生き物を報告します。まずは指標生物の種類から。

ナミウズムシ、サワガニ、カワゲラ、ヘビトンボ、ナガレトビケラ

これらは水質階級Ⅰ(きれいな水)に属する10種類のうちの5種類に該当します。

水の汚れ度が高くなる水質階級Ⅱ・Ⅲ・Ⅳにあたる生きものはいませんでした。

それ以外に見つかった生き物は、モンカゲロウ、コカゲロウ、シマトビケラ、ガガンボ、サナエトンボ(ヤゴ)、カワトンボ(ヤゴ)、ムカシトンボ(ヤゴ)、ナツアカネ(成虫)

この中に黒く逞しい身体を持つ、気になるものがいたので持ち帰り調べたところ、私も初めて見る「ムカシトンボ」のヤゴでした。このトンボは2011年に栃木県の準絶滅危惧種に指定されています。年間を通して水温が15から16℃の水が流れてくる、両側に林のある小さな川が生息条件で、成虫になるまで5～6年かかると本に記載されています。まさに霧降川のこの地点はムカシトンボが生きていくのにピッタリの場所でした。(24日になっても生きていたので元の場所に放して来ました)

川のかたちや周辺の雰囲気など、日光市にはいろいろな流れをもつ川がたくさんあります。機会をつくって、それぞれ特徴ある川を探っていくのも、日光市に育つ子供達に向けた当会の役目ではないかと思えた霧降川の「川虫たんけん」でした。(塚崎)



写真上(霧降川)
こんな川です。
白い四角内は
ムカシトンボのヤゴ

写真左(小倉・行川)
羽化したコオニヤンマ
右は脱ぎ捨てた殻

写真下(小倉・行川)
採取した川むしを分類





映像詩の世界を追って

もうどのくらい前になるのだろうか。NHKハイビジョンで写真家・今森光彦氏の映像詩「里山・命をめぐる水辺」が放映されたことがあった。葦が生い茂った水面を、川魚漁師の田中三五郎さんが静かに櫓を漕いでいく。漁を終えた三五郎さんが母屋とは別の建物でその日の収穫物をさばく。その建物には小さな池があり、いくつか区分けされていて、一番外側には大きな鯉が…。作業する気配を感じたと思った鯉たちが集まってくる。三五郎さんから処理されたおこぼれをを貰うのだ。鯉達をなでている三五郎さんの穏やかな笑顔。絶対忘れられないものだった。

映像は琵琶湖西岸の湧き水を今も利用する人々の暮らしを紹介しており、いつか訪ねてみたいという思いを膨らませるものだった。今年五月、たまたま大津に会合があったので、その帰路にこの湖西地方に立ち寄り、水利用の実例を確かめたいと湖西線に飛び乗った。

ところでこの湖西線、何と呼ぶのかわからず、私は「こさいせん」と呼んで、関西在住の友人に笑われてしまった。これは「こせいせん」だそう。そして湧き水のある場所は、滋賀県高島市新旭町針江という小さな静かな地区。高島市という場所や名前を知っているのは、琵琶湖や京都方面に相当詳しい人だろうと思う。私は今回、初めてその位置を知ることができた。高島屋デパートの名は、創業者の父の出身地にちなんだものという。

生水(しょうず)の郷

針江は、湖西線「新旭」が下車駅。店舗も見当たらない東口の簡素な駅前広場から歩くこと15分。昔ながらの焼杉板の家が目立つ住宅街にたどり着くと、そこにはバイカモやミクリが豊かに育つ水路があった。当日の案内をお願いしたボランティアガイドさんが針江公民館で待っていてくれた。

針江は、丹波高地や比良山地を水源とする安曇(あど)川水系の伏流水が豊かな土地。山から湖への距離もそう遠くではないから、注がれる量も多いのだろう。一日の湧水量は3,500トン。湧水は生きた水、生かされている水ということで、この地では「生水(しょうず)」と呼ぶのだそう。

川端(かばた)文化

映像が放送されてより、針江を訪れる人々が増えた。そこで、住民達は今まで意識していなかった足元の湧水を改めて見直し、江戸時代から続く知恵を生かした水利用を地区全体で復活させることにしたのだそう。

各家庭は自家井戸を持ち、飲料や料理に使われるのがまず壺池の水、そこから溢れた水は端池(はたいけ)に。その端池には鯉や鮒が飼われていて、食事を作る際に出る野菜屑やご飯つぶは彼らが喜んで食べてくれるのだという。私が見学した川端には鯉や鮒だけでなく、太い胴を持つ大きな山椒魚もいてびっくりしたが、人間と一緒に暮らしている感覚が伝わってきて、まるで飼った犬と会ったような懐かしさを持った。地下水だから一年中水温も13度前後で、夏は冷たく、冬は温かい。人々のこの独特の水利用は、前の滋賀県知事・嘉田由紀子によって「川端文化」と名付けられたそう。

郵便振替口座 00140-4-535550

連絡先

〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方

今市の水を守る市民の会

0288-27-2183 (8時～17時:森)

0288-26-3324 (17時～21時:塚崎)

<http://www.somesing.net/daiyagawa/>



水を守る責任とは

近江八幡、彦根、長浜と、華やかな歴史の舞台とは対岸にある湖西地方。山から丘陵を経て琵琶湖へと続く地は、昔も今も厳しい自然環境だ。湖西線が開通したのもそう古いことではない。人口密度も東岸とは比べ物にならないから、古くからの知恵が残されていたのだろう。それが消える前に復活できたのは、映像の力もあるが、琵琶湖という母なる器に抱えられて暮らしていることを人々が気付いたことだった。「針江生水の郷委員会」を作り、その保護に取り組んでいる。

端池には元気な鯉たちがいる。そんな彼らの為にやさしい針江の人々は、川端で洗剤を使うことを禁止したのだそう。今も108基の川端が利用されており、使われた水は家の外を流れる水路に出て、琵琶湖に行き着く。水路はきれいに掃除されており、小水力発電装置が備えられ、遊歩道の街路灯に利用。暑くなると子供達の筏乗り競争が行われるのも毎年の恒例行事だとか。

蛇口をひねればすぐ水の出る現代だが、水を確保することに苦労した人々の知恵をもう一度知る時代に入ったのではないだろうか。次の人のために自分が使った水は綺麗にして返す、日本人のこの感性は世界に誇れるものだ。これらは新しいエコとして、先人たちのこの知恵が必ず生かされる機会の増えていくことだろう。私たちの今市も古くから地下水利用があった土地。水にかかわる知恵が必ずあることを今一度知りたと思う。そんな思いを針江地区訪問が授けてくれた。(塚崎)

編集後記

8月発行予定であたふたしている間に季節は初秋。突風や竜巻などのニュースが新聞を賑わしています。台風が来ているわけでもなく、まだ木枯らしの季節ではない。ふつうの1日のなかで自然が突然凶暴化するという、いままで経験のない変化が起きてるように思えます■とはいっても、みのりの秋。恵みに感謝しつつこの地球の上で共存できる生活文化を考えていきたいものです。(T)